

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520425

研究課題名(和文)フリジア語研究のドイツ語学・英語学への貢献と研究成果の継承

研究課題名(英文)Contribution of Frisian linguistics to German and English studies and succession of its achievements

研究代表者

清水 誠 (Shimizu, Makoto)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40162713

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、申請者のフリジア語研究の蓄積をドイツ語学および英語学に関連づけ、マイナーな周辺言語の記述がメジャーな中心的言語に研究に貢献し得ることを示し、ゲルマン語類型論の研究を推し進めた。あわせてフリジア語研究の社会的還元と学問的継承にも留意した。その結果、16編の論文と7冊の著書を刊行することができた。著書の中で共著・分担執筆は5冊であり、その1冊では編者をつとめた。残りの2冊は単著である。とりわけ『ゲルマン語入門』(三省堂 2012 単著)によって第11回日本独文学会賞(2014)を受賞したことは、特筆に値する。

研究成果の概要(英文)：In this program, I have mainly attempted to bring my Frisian linguistic studies in to a close relationship with the German and English ones in order to make clear that descriptive studies on minor languages can contribute to linguistic investigations into major ones. At the same time, I have paid special attention to the succession of the achievements of Frisian studies to the next generation in Japan. The results of the present program are represented in 16 articles and 7 books. 5 of the books have been written together with other researchers. In one of them, I have acted as the editor. In the remaining 2 books, I am the sole author. It should be noted that I have been awarded the 11th Prize of the Society of German Linguistics and Literature of Japan (JGG) on account of my monograph: The Germanic Languages. A Primary Guide (Sanseido 2012).

研究分野：ドイツ語学・ゲルマン語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：フリジア語 英語 ドイツ語 ゲルマン語 アイスランド語 北欧語 オランダ語

1. 研究開始当初の背景

日本のヨーロッパ系言語研究の中で、ゲルマン語は中心的な位置を占め続け、英語とドイツ語が重視されて研究者も多い。一方、かつて日本人が最も熱心に学んだオランダ語は看過され、オランダ語学のポストは日本の大学には残っていない。北欧語(北ゲルマン語)の研究も手薄であり、フリジア語研究に至ってはなおさらである。また、日本のドイツ語学と英語学の対象は標準語に集中しているが、ゲルマン語圏での最近の研究では、ドイツ語・英語の諸方言や他のゲルマン諸語からデータを援用して、理論的展開を試みる例が急増している。近年のヨーロッパでは、EUの形成と政治的・経済的再統合の流れの中で少数言語擁護の機運がとみに高まり、言語研究にも反映され始めた。フリジア語の研究も、一般言語学との連結を試みて高い学問的水準に達している。

本研究の趣旨は、こうしたゲルマン語圏での研究動向に即応するものである。これまでの科研費の交付による申請者のフリジア語研究が一定の学術的成果を挙げた現時点で、次の課題として、少数言語記述の枠を越えて、ドイツ語や英語のようなメジャーな言語研究の進展に積極的に寄与し、次世代へのフリジア語研究の継承を試みるという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、申請者のフリジア語研究の蓄積をゲルマン語類型論の視点からドイツ語学および英語学に関連づけることにより、マイナーな周辺的言語の記述がメジャーな中心的言語の研究に貢献し得ることを示し、大国の言語に偏りがちな近年の言語学研究の動向を批判し、別の研究のあり方を提示することにある。併せて、フリジア語研究の継承・普及のために、フリジア語へのアクセスを容易にすることにも尽力する。具体的には次の2点の成果達成を目指した。

(1) フリジア語に特徴的な言語現象の分析を通じて、オランダ語等にも配慮し、ドイツ語・英語研究でこれまで周辺的で看過されてきた現象にたいして、ゲルマン語類型論の視点から新しい知見と理論的意義付けを与えるような一連の論文・図書を発表する。

(2) 申請者の学術書である『西フリジア語文法 現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』をもとに、オランダ語入門書の執筆経験を生かして、フリジア語の入門的解説を執筆し、研究者や一般人の関心をフリジア語に向け、フリジア語学の国際化と社会的還元に貢献する。

3. 研究の方法

申請者は、すでに2編の雑誌論文「言語規範

と普遍性 フリジア語と関連言語における名詞抱合、品詞転換、逆成」『ドイツ文学』(日本独文学会 2006)と『ドイツ語・オランダ語・フリジア語の接頭辞動詞とBE-動詞』『エネルギー』(ドイツ文法理論研究会、朝日出版社 2007)において、ゲルマン語類型論の方法論に基づく具体的な分析を行っている。とくに前者はドイツ語では周辺的な「名詞+動詞」型の複合動詞の意義をフリジア語、オランダ語、英語、スウェーデン語と対照させて類型論的に論じたもので、「第5回日本独文学会賞」(2008)を受賞した。今回の研究は、この方向を推し進めることを目指すものである。フリジア語には独特な興味深い言語現象が散見されるが、それは歴史的系統関係から互いに類似した構造を持つドイツ語や英語にも周辺的に見られることが多く、周辺性ゆえに正当な扱いを受けてこなかった傾向がある。そこに、フリジア語の分析を通じて、ゲルマン語類型論の視点から新たな光を当てようとする試みである。また、本研究では西ゲルマン語だけでなく、北ゲルマン語で驚くべき古風な性格を保つアイスランド語にも焦点を当て、同言語の音韻・文法的特徴と言語擁護の歴史も視野に入れた。

もう一つの目標であるフリジア語の入門的解説の執筆については、英語で書かれた入門書が皆無である現状に鑑みて、フリジア語の構造を平明に解説し、研究成果の社会的還元と次世代への研究成果の継承を意図した。これにはフリジア語使用地域であるドイツ、オランダの関係諸機関からの国際的要請に応える意義もある。

以上に述べた研究成果を挙げるために、必要な各種の資料収集、言語調査、機器購入、学会発表、論文発表、図書刊行を計画し、実行した。

4. 研究成果

(1) 2009年度：以下の表に記したとおり、雑誌論文4編(いずれも単著)、図書3冊(共著2冊、単著1冊)を発表し、学会発表1件(単独発表)行った。

雑誌論文「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」の中心的テーマは、19世紀ロマン主義の高揚に伴う歴史比較言語学研究である。ここでは印欧語歴史比較言語学研究およびゲルマン語歴史比較言語学の創始者の一人であるデンマーク人の言語学者ラスク(Rasmus Rask)の業績の再評価を行い、そのフリジア語研究の意義にも言及した。日本アイスランド学会での研究発表「19世紀歴史比較言語学とロマン派文学 Rasmus Rask と Jónas Hallgrímsson を中心に」は、この趣旨に沿って行ったものである。

残りの3編の雑誌論文「北欧アイスランド文学

の歴史 (1) 「リームル」からロマン派まで」、
「北欧アイスランド文学の歴史 (2) 自然主義から新ロマン派まで」、
「北欧アイスランド文学の歴史 (3) ハルドウル・ラハスネスから20世紀末まで」は、アイスランド文学の歴史に照らしてアイスランド語擁護の歴史を論述したもので、純粋な文学的研究ではなく、広義の社会言語学的論考としての性格が強い。これは図書『北欧アイスランド文学の歩み』として結実した。同書は申請者が北海道大学文学研究科から刊行助成金を得て、出版費用の一部に当てる形で刊行された。同書はまた、日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』142号 (2011) の書評に取り上げられた。

次に、フリジア語使用地域のひとつであるオランダ語圏の言語研究の歴史を扱った図書『言語研究の諸相』所収の「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」では、本題と並んでフリジア語研究の足跡とフリジア語擁護の変遷にも言及した。最後に、図書『事典世界のことば141』では、与えられた紙面でフリジア語の概略を与えた。

(2) 2010年度：以下の表に記したとおり、雑誌論文3編 (いずれも単著)、図書2冊 (いずれも共著) を発表し、招待講演1件 (単独発表) を行った。

雑誌論文3編はゲルマン語歴史比較言語学とアイスランド語の音韻をフリジア語との関連で扱ったものである。「ゲルマン語の歴史と構造 (1) 歴史言語学と比較方法」は、19世紀ゲルマン語歴史比較言語学の誕生を跡づけ、その方法論を批判的に解説したものである。他の2編「アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点 (1)」、「アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点 (2)」では、標準発音を欠くアイスランド語の音韻体系と日本語への転写の考察を通じて、同じく標準語の規範が不明確なフリジア語の音韻の考察に役立てることを目指した。

2冊の図書 (共著) は北フリジア語の概説と上記のアイスランド語関係の雑誌論文2編の改訂版である。まず、「フリジア語」(『ニューエクスプレススペシャル・ヨーロッパのおもしろ言語』所収) は、日本で初めて市販された北フリジア語の概説といえる。これは、本研究の趣旨のひとつであるフリジア語学の社会的還元と研究成果の継承の具体的成果といえる。次に、「アイスランド語の音韻とカナ表記」は、申請者が2010年5月から2年間、会長を務めた「日本アイスランド学会」の創立30周年を記念して、申請者が編者として刊行した図書『アイスランドの言語、神話、歴史 日本アイスランド学会30周年記念論文集』に収められている。同書は申請者が北海道

大学文学研究科から刊行助成金を得て、出版費用の一部に当てる形で刊行された。同書は、日本で初めて出版されたアイスランド研究にかんする専門的な論文集といえる。

最後に、ヨーロッパ諸言語の系統と歴史的発達について、「ことばの履歴書 ヨーロッパ諸言語の系統と発達」と題する招待講演を行った。これは本研究の成果を社会的・教育的貢献として役立てることを意図したものである。

(3) 2011年度：以下の表に記したとおり、雑誌論文3編 (いずれも単著) を発表し、研究発表2件 (いずれも単独発表) を行った。

雑誌論文3編は、ゲルマン語歴史比較言語学にかんするものである。「ゲルマン語の歴史と構造 (2) - ゲルマン祖語の特徴 (1) -」は、前年度に発表した「ゲルマン語の歴史と構造 (1) - 歴史言語学と比較方法 -」の続編であり、ゲルマン語の由来とその歴史言語学的分類、および古フリジア語が属する北海ゲルマン語を含めて、古ゲルマン諸語のデータをもとに、ゲルマン祖語に由来する諸特徴を歴史比較言語学の方法で論じたものである。「ゲルマン語の歴史と構造 (3) - ゲルマン祖語の特徴 (2)、古ゲルマン諸語 (1) -」および「ゲルマン語の歴史と構造 (4) - 古ゲルマン諸語 (2)」はその続編をなすもので、古ゲルマン諸語の音韻と形態にかんする諸特徴、とくに子音推移、母音交替、ウムラウト、強変化動詞と弱変化動詞、名詞の文法範疇、形容詞弱変化の発達を取り上げた。

研究発表は2件行った。まず、「ゲルマン語の「n」の脱落」と形容詞弱変化の非文法化は、上記の最後の論文で扱った形容詞弱変化の発達に加えて、現代ゲルマン諸語でのその衰退と機能的変化を「n」の脱落」という音韻変化に関連づけて論じたものである。この発表は、2011年12月に申請者がその中心的メンバーの一人として設立した全国規模の学会である「日本歴史言語学会」の第1回総会・研究発表会 (大阪大学) の席上で行った。申請者はまた、同学会の理事に選出され、現在に至っている。もうひとつの「北海の言語」は北海道大学北方研究教育センター主催の講演会で行われたもので、北ドイツで話されている北フリジア語の特徴とその歴史および言語擁護の内容としている。

(4) 2012年度：以下の表に記したとおり、雑誌論文3編 (いずれも単著)、図書2冊 (単著1冊、共著1冊) を発表し、研究発表1件 (単独発表) を行った。

内容的には、いずれもゲルマン語歴史比較言語学とゲルマン語類型論にかんするものである。3編の雑誌論文の中で、まず、「ゲルマン語類型論から見たドイツ語の語順変化 (1) - 名詞句成分 -」はドイツ語の語順の発達を他

のゲルマン諸語との関連から考察したもので、冠詞・形容詞・属格と名詞の語順、および冠飾句を扱った。本論文は量的に大幅に縮小して、図書『講座ドイツ語学第2巻ドイツ語の歴史論』の第2章「語順の変遷—ゲルマン語類型論の視点から—」の前半部分として収録し、出版した。また、京都ドイツ語学研究会で行った研究発表「ドイツ語とゲルマン語の枠構造をめぐって」では、本論文の続編となるべき動詞句と文の語順の発達を扱った。

次に、「ゲルマン語形容詞強・弱変化の非文法化」は日本歴史言語学会からの依頼論文であり、印欧語としてのゲルマン語独自の特徴とされる形容詞強・弱変化の二重構造が中世以降、現代ゲルマン諸語に至るまでに被った非文法化(脱文法化 *degrammaticalization*)の過程について考察したものである。

最後に、「ゲルマン語の歴史と構造 (5) - 現代ゲルマン諸語 - 」は前年度に発表した「ゲルマン語の歴史と構造 (1)~(4)」の最後の続編にあたる。近世以降のゲルマン諸語の発達、社会言語学的現状に加えて、北ゲルマン語に属する主要4言語(スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語ブークモール、アイスランド語)と英語を除く西ゲルマン語に属する主要4言語(ドイツ語、オランダ語、西フリジア語、アフリカーンス語)の合計8言語の音韻と正書法の特徴を論じた。本論文は、昨年度までに発表した4編の先行論文とともに、大幅な加筆・縮小を加えて、図書『ゲルマン語入門』(三省堂、単著)として出版した。これは本研究のこれまでの成果を集約したものであり、重要な意味を持っている。

(5) 2013 年度: 以下の表に記したとおり、3編の雑誌論文(いずれも単著)を発表し、1件の研究発表(単独発表)を行った。

いずれもテーマは接頭辞動詞である。西フリジア語の動詞接頭辞 *be-* は他の西ゲルマン諸語と大きく異なっており、とくに中高ドイツ語の動詞接頭辞 *ge-* との類似性に注目した。そして、文法範疇としてのアスペクトを動詞の語形変化において、祖語の段階で失ったゲルマン語がその代替手段を発達させたという問題に関連させた。古ゲルマン諸語は動詞接頭辞によって語彙的レベルで完了アスペクトを表示していたと考えられるが、迂言形としての完了形の発達で、動詞接頭辞の機能はアスペクトの表示から他の文法的意味に移行し、話法の表現手段ともなったと考えられる。本研究では、西フリジア語は動詞接頭辞 *ge-/er-/be-* の中で *be-* をその代表的手段として発達させたと推定し、その過程を歴史言語学および言語類型論的に考察した。具体的成果はドイツ語による雑誌論文 “Die *be-Verben* im *Westerlauwersschen Friesisch*” として、フリジア語学の国際的学術誌である *Estrikken/Ālstrāke* 94 に発表

し、誌面の制約で割愛した部分を大幅に補って、雑誌論文「西フリジア語の接頭辞動詞と *be-* 動詞をめぐって」にまとめた。なお、「ドイツ語とゲルマン語の枠構造をめぐって」は2012年に行った上記の研究発表の要約である。

研究発表は、日本アイスランド学会で「ゲルマン語類型論から見たアイスランド語の音韻と正書法」と題して行った。

さらに、本科研費の援助によって出版した上述の図書『ゲルマン語入門』(三省堂、単著)によって、「第11回日本独文学会賞」(2014)を受賞した。同賞の受賞は、同じく本科研費の援助による研究にたいして贈られた第5回(2008)に続いて2度目となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 16 件)

- 1 “Die *be-Verben* im *Westerlauwersschen Friesisch*”, Makoto Shimizu, *Estrikken/Ālstrāke* 94 (Grins/Groningen, Kil/Kiel), 査読有 (依頼論文), p. 251-265, 2013 年
- 2 「ドイツ語とゲルマン語の枠構造をめぐって」, 清水 誠, *Sprachwissenschaft Kyoto*, 査読有, 12 号, p. 82-85, 2013 年
- 3 「西フリジア語の接頭辞動詞と *be-* 動詞について」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 140 号, p. 57-97, 2013 年
- 4 「ゲルマン語形容詞強・弱変化の非文法化」, 清水 誠, 歴史言語学 (日本歴史言語学会), 査読有 (依頼論文), 1 号, p. 39-71, 2012 年
- 5 「ゲルマン語類型論から見たドイツ語の語順変化 (1) 名詞句成分」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 138 号, p. 1-29, 2012 年
- 6 「ゲルマン語の歴史と構造 (5) 現代ゲルマン諸語」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 137 号, p. 23-82, 2012 年
- 7 「ゲルマン語の歴史と構造 (4) 古ゲルマン諸語 (2)」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 136 号, p. 53-101, 2012 年
- 8 「ゲルマン語の歴史と構造 (3) ゲルマン祖語の特徴 (2), 古ゲルマン諸語 (1)」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 135 号, p. 41-88, 2011 年
- 9 「ゲルマン語の歴史と構造 (2) ゲルマン祖語の特徴 (1), 古ゲルマン諸語 (1)」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 134 号, p. 31-67, 2011 年
- 10 「アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点 (2)」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 133 号, p. 1-44, 2011 年
- 11 「アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点 (1)」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 133 号, p. 57-77, 2010 年
- 12 「ゲルマン語の歴史と構造 (1) 歴史言語

- 学と比較方法」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 131 号, p. 1-40, 2010 年
- 13 「北欧アイスランド文学の歴史 (3) ハルドウル・ラハスネスから 20 世紀末まで」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 130 号, p. 69-124, 2010 年
- 14 「北欧アイスランド文学の歴史 (2) 自然主義から新ロマン派まで」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 129 号, p. 1-62, 2009 年
- 15 「北欧アイスランド文学の歴史 (1) 「リームル」からロマン派まで」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科紀要, 査読無, 128 号, p. 139-194, 2009 年
- 16 「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」, 清水 誠, 日本アイランド学会会報 (日本アイランド学会), 査読有, 28 号, p. 1-34, 2009 年

〔学会発表〕(計 6 件)

- 1 「ゲルマン語類型論から見たアイスランド語の音韻と正書法」, 清水 誠, 日本アイランド学会, 2013 年 6 月 8 日, 金沢大学 (金沢市)
- 2 「ゲルマン語の枠構造をめぐって」, 清水 誠, 京都ドイツ語学研究会, 2012 年 12 月 1 日, 京都大学 (京都市)
- 3 「北海の言語」, 清水 誠, 北海道大学北方研究教育センター, 2012 年 3 月 23 日, 北海道大学 (札幌市)
- 4 「ゲルマン語の「n の脱落」と形容詞弱変化の非文法化」, 清水 誠, 日本歴史言語学会, 2011 年 12 月 8 日, 大阪大学 (豊中市)
- 5 「ことばの履歴書 ヨーロッパ諸言語の系統と発達」(招待講演), 清水 誠, 私を育んだ故郷講座, 2010 年 10 月 18 日, 静岡県駿東郡清水町地域交流センター (静岡県駿東郡清水町)
- 6 「19 世紀歴史言語学研究とロマン派文学 Rasmus Rask と Jónas Hallgrímsson を中心に」, 清水 誠, 日本アイランド学会, 2009 年 5 月 30 日, アイスランド大使館 (東京都品川区)

〔図書〕(計 7 件)

- 1 共著「語順の変遷 ゲルマン語類型論の視点から」, 清水 誠, 新田春夫・高田博行編『講座ドイツ言語学第 2 巻 ドイツ語の歴史論』(ひつじ書房), p. 37-64, 2013 年
- 2 単著『ゲルマン語入門』(三省堂), 清水 誠, 224pp. 2012 年
- 3 共著「アイスランド語の音韻とカナ表記」, 清水 誠, 清水 誠 (編)『アイスランドの言語、神話、歴史 日本アイランド学会 30 周年記念論文集』(麻生出版), (北海道大学文学研究科出版助成金取得), p. 49-106, 2011 年
- 4 共著「フリジア語」, 清水 誠, 町田健監修『ニューエクスプレススペシャル・ヨーロ

ッパのおもしろ言語』(白水社), p. 68-87, 2010 年

- 5 共著「オランダ語研究の歴史と言語規範の成立」, 清水 誠, 北海道大学文学研究科言語情報学講座編『言語研究の諸相』(北海道大学出版会), (北海道大学文学研究科出版助成金取得), p. 183-252, 2010 年
- 6 単著『北欧アイスランド文学の歩み 白夜と氷河の国の六世紀』清水 誠, (現代図書), (北海道大学文学研究科出版助成金取得), x + 429 pp. 2009 年
- 7 共著「フリジア語」, 清水 誠, 梶茂樹・中島由美・林徹編『事典世界のことば 141』(大修館書店), p. 448-451, 2009 年

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

清水 誠 (SHIMIZU, Makoto)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 40162713

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし